

Stuttering is OK because what I say is worth repeating.

—どもってもいい。なぜなら私が言うことには、繰り返す価値があるから—

遠藤 優



私は、小学5年生の頃に側音化構音が、中学1年生の頃に吃音が顕在化しました。当時は、側音化構音での苦勞が多く、吃音は軽いものでした。2つが別の障害であり、ことばの教室のように支援を受けられる場があるとは知らず、側音化構音を原因としたいじめを受け続けました。先生が指導してくれたとしても、「チクった」とさらにエスカレート。死にたくなることもありました。通常学級の先生には、構音障害や吃音をもっと知ってほしいです。

「勉強していい学校に行けば、楽しい学校生活を送ることができる」その一心で勉強に励み、第一志望の高校に合格。個性を尊重してくれる高校でしたので、過ごしやすい環境でした。しかし、大学進学に向けた浪人生活中から、吃音が急激に悪化しました。自由に話せていた頃とのギャップに苦しみ、吃音を隠そうと努力しました。大学では人と話す機会を避けたいがために欠席することが増えて、勉強も手に付かなくなりました。

転機は、大学2年生の8月。トルコ旅行で有意義な経験を積んだ私は、「普段の私は何をやっていたのだろう？逃げてばかりの生活は、無駄な時間を過ごすだけだ」と感じるようになりました。自分の吃音にもっと向き合いたいと考え、同大学の医学部健康総合科学科に進学。吃音者の集まりである「東京言友会」「小中高校生の吃音のつどい」にも参加するようになりました。卒業論文では吃音に関する研究をし、2016年の吃音流暢性学会で発表しました。吃音世界大会にも、2016年と今年2018年に参加。吃音があるという共通項で世界の人とつながれたことはとても嬉しく、言語が違っても、吃音の出方は同じなのだ、実感しました。将来は自分の経験を活かしながらも、専門的な視点で吃音とかかわっていきたいと考えるようになり、他大学の医学部に進むことにしました。

吃音者の集まりに参加するようになってから、カミングアウトにも挑むようになりました。初のカミングアウトは2013年、学科の自己紹介冊子に「名前がスムーズに言えなくても、不快に思わないください」と掲載。一部の人に理解してもらっただけで、だいぶ楽になりました。2016年には、Facebookでカミングアウト。昔の友達も含めて、誰に対しても伝えられるようになりました。現在、大学の友達には、グループLINEの自己紹介でカミングアウトしています。このような形が自分には一番負担が少なく、効果的でした。カミングアウトは、リスクを減らす手段として有効であると思います。

「小中高校生の吃音のつどい」では、現在もスタッフを続けています。どもるのは自分だけではないと思える場で、遠慮なくどもりながら、同年代の吃音のある友達を作れること、年上の人たちから吃音との付き合い方を教わるができることが、つどいの意義であると思います。

吃音は一生つきあっていかななくてはいけないので、どもりながらであっても、言いたいことを伝えることが重要です。これからの子どもたちには、「どもってもいいよ」「どもりながらでも、生きていけるよ」「つらいことがあったら、悩んでもいいよ」「自分ひとりで抱え込まず、相談しよう」と伝えたいです。

わたしの23年

吉沼 恵梨



1歳半で難聴がわかり、幼児期から聴覚や言語の訓練を受けましたが、幼稚園からずっと健聴の子と同じ環境で育ちました。ちょっとしたトラブルは時々あったものの、それほど大変な思いをせず、子ども時代を過ごすことができました。恵まれた環境だったと思います。

小学校時代は石神井小学校の難聴学級に通い、サポートしていただきました。でも5年生になると、「難聴があるからといって、違う扱いをされたくない」と思うようになり、補聴器や通級していることを隠すようになりました。

中学校時代は、できるだけ自分で努力したいと思い、通級はしませんでした。英語のリスニングは苦労しましたが、家庭で英語教材のCDを何度も聞いて特訓しました。この経験から、「難聴という障害をもつことから、人一倍努力するしかない」と考えるようになりました。人間関係では、障害によって差別してくる人もいましたが、「冷静でドライな対応をすることが、心の安定につながる」と考えていました。

高校時代は、自分の限界を知りたくて、接客業のアルバイトに挑戦…時には、お客さんの注文や社員の指示を聞き逃して失敗することもありましたが、「同じ失敗は二度としない」と決めて、集中して聞き、聞いた内容を確認するようにしました。最終的にはバイトリーダーを任されるようになりました。バイトでの成果に加え、勉強でも努力が実って良い成績を残せたことで、「目標に対して、何事も一生懸命やる」という意識がはっきりしていれば、障害は関係ない」と思えるようになりました。

大学は、広い講堂での講義も増え、授業の聞き取りに苦労しました。その分、教授が書いた本を読んで勉強したりもしましたが、これが語彙や教養を増やすことにもつながり、一石二鳥となりました。時には友達にもサポートしてもらいました。でもやはり、自分で解決することが自信につながると考えていました。「障害をバネに何かを達成することは、障害に対するコンプレックスを解消すること」なのだ。

就職活動は、障害者採用で応募することにしました。当初は一般採用との併用でしたが、障害者採用は人事のサポートが厚く、話をしっかり聞いてもらえたり、会社のことがよくわかったりする良さがありました。現在は、キンビバレッジの販売推進担当をしています。騒がしい環境、歩きながらの商談、マスクしている人との会話、体力仕事からくる疲労など、聞こえにくくなる条件が日常的にいくつもありますが、相手の口をよく見て話す、こちらが率先してハキハキ話す、確認を緻密に行う、立ち止まって話せるような関係を作るなど、自分なりに対処しています。

これからの子どもたちには、相談する勇気をもつこと、小さい頃から確認する習慣をつけること、健聴の人とのコミュニケーションに慣れておくこと、健聴の人にはどう対応してほしいか予め伝えること、自分で努力し、失敗や成功から学んで自信をつけることを、ぜひ伝えたいです。

障害は個性であり、強みです。できないから諦めるのではなく、できるようにするためにどうすればいいか考え、そして行動する…その経験の積み重ねが、障害を個性や強みにしてくれると信じて、頑張ってください。